



「佐々木さんを支援する会」会報

ウブムエ

事務局 〒235-0041 横浜市磯子区栗木 1-22-3 / TEL 045-774-9861
洋光台キリスト教会内(蛭川明男牧師) / ●世話人会代表 加藤 誠
●事務局長 播磨 聡 (広島キリスト教会 TEL 082-293-8683)

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

「和解をあきらめない」

佐々木 和之
さ さ き か ず ゆ き

皆様こんにちは！お祈りとご支援を有難うございます。ルワンダは鮮烈な青空の日が多い季節です。ほぼ3ヶ月半ぶりの活動報告をお届けします。

★ 高く評価されたピアスの教育内容

私が働いている大学のProtestant Institute of Arts and Social Sciences (PIASS/ピアス)が、間もなくProtestant University of Rwanda (PUR/ピュア)へと名称を改めることになりました。これまでのルワンダ教育省の説明では、ピアスが四つ目の学部を創設した時点で、総合大学を意味する「university」となるはずでした。しかし、昨年9月末、国内にある24の高等教育機関全てを対象に実施された業務監査において、ピアスの評価がとても良かったため、政府からの「ごほうび」として、現在の三学部のままの名称変更が許可されたのでした。

国際的な監査チームが執筆した報告書では、「平和学、コミュニティー開発、和解と発展のための教育の分野において、国際的に競争力を持った、模範的な高等教育機関である」と称賛されていました。

★ 「平和と開発センター」の多国籍チーム

またこの報告書では、「平和と開発センター」を通して地域コミュニティーを対象に平和構築やコミュニティー開発に関するトレーニングを実施してきたことや、平和構築専攻の学生たちがピースクラブを通じて大学の内外で若者たちを対象に平和教育活動を進めてきたことが特筆されていました。

「学びと実践」の融合を目指すこれまでの取り組みが、高く評価されたことを嬉しく思います。

2年前にピアス開発学部に創設された「平和と開発センター」は、まだまだ発展途上の組織ですが、昨年11月、経験豊富な平和構築専門家、アン・ディートリッヒさんが働きに加わって下さいました。昨年3月、ピアスが出した専門家派遣の要請に応え、ドイツの複数のNGOが政府の支援を受けて運営している「ドイツ市民平和奉仕団」(German Civil Peace Service)が、アンさんを派遣して下さったのです。アンさんはこれまで5ヶ国で働かれた経験を持つ平和構築トレーニングの専門家ですが、着任後から非暴力コミュニケーションや紛争変容のワークショップを精力的に実施され、今ではセンターの大黒柱になられています。

またこの3月からは、ブルンジ人留学生のフロリアン・ニュンゲコさんがインターンとしてセンターの活動に加わりました。フロリアンさんは、ピアス・ピースクラブの代表でもあり(ウブムエ33号に掲載された文章参照)、9月末に予定されている卒業後は、センターの正職員として働くことが内定しています。

アンさん、フロリアンさん、セルジくん（平和構築専攻第一期卒業生）、私という多国籍チームで、センターの活動をさらに充実したものにしていきたいとはりきっています。



＜平和と開発センターの多国籍チーム＞

★ 元留学生によるNHKドキュメンタリー制作

3月にNHK BS-1で《明日世界が終わるとしても「虐殺を越え」隣人》に戻るまで〜ルワンダ・佐々木和之》が放映されました。企画・製作を担当されたのはピアスの日本人留学生第一号の加藤麗さん。留学中に会った、大虐殺後を生きるルワンダの人びとの「葛藤と希望」を描き出すために、彼女が「魂を込めて」この番組を作って下さったことに感謝します。加藤さん、今度はピアスの卒業生たちの平和への取組みを撮影するために、何年か後にぜひ戻ってきてください！

ご覧になられた皆様は、どのようなこととお感じになられたでしょうか。私は、出演されたキレへの方々、虐殺の被害者であれ加害者であれ、一人の人間として、心の深いところから、ご自身の葛藤と希望についてカメラの前で語って下さったことが有難く、感謝の気持ちで一杯です。

今回の番組のハイライトは、23年前、農耕用のナタで顔面を含め、体の各所を切り刻まれながら奇跡的に生き残ったサラビアナさん（フランス語読みではサベリアナさん）と、殺傷行為に直接手を染めなかったものの、数々の襲撃事件に加担し、サラビアナさんが攻撃された現場にもいたアンドレさんの「対話」を私が取り持つプロセスでした。

そのような被害者・加害者間の仲裁は、実は私の本業ではありません。私はこれまで、現地NGOと協力しながら「トラウマからの癒し」、「修復的正義を通しての和解」といったテーマのセミナー、加害者による被害者のための「償いの家造り」、被害者・加害者が共に参加する協働プロジェクト等の活動に関わってきましたが、それらは基本的に、被害者と加害者が出会い直す場を作り、その後、その方々自身の関係修復の歩みを側面的に支援するものでした。「皆さん、さあ仲直りしましょう」と私が呼びかけ、和解のプロセスを主導したようなことはありませんし、ましてや外国人である私が、直接的に両者の仲裁役を務めたことはありませんでした。

今回そんな私を被害者・加害者間対話へと押し出したのはサラビアナさんでした。彼女が「償いの家造り」で加害者たちに家を建ててもらった後、加害者の一人であるタデヨさんを赦し、彼ととても良い関係を築いてきたことは、これまでお伝えしてきた通りです。

サラビアナさんはその後も機会のあるごとに、「私のところに謝罪に来ていない人は、ぜひ私を訪ねてください」、と呼びかけてこられました。しかし、加害者のほとんどが、裁判の場で形式的な謝罪をしたこと、また、家造りに取り組んだことで、自分たちは既に赦されたと考えていたのです。そしてその後、彼女から何度も謝罪への招きを受けながらも、心で受けとめる人はほとんどなかったのです。

4年前にピアスのあるフィエに引っ越すことになり、片道6時間はかかるキレへの村々を頻りに訪ねることが困難になりましたが、「本物の和解にしたい」というサラビアナさんの叫びが、私の心の中でこだまし続けていました。そこで私は、彼女が参加する養豚組合のメンバーで、直接の加害者にあたる6名の男性たちと何度か対話を持ちました。また、協力団体であるREACHに「和解を深める」必要があることを訴え、フォローしてくれるようお願いしたのでした。

昨年の3月末、ジェノサイド記念期間が始まる直前、キレへでREACH主催の集会が開かれることになり、私と恵、卒業生のベレニスさん、そして二名の日本人

留学生も参加しました。その集会では「償いの家造り」から養豚組合に至る歩みを振り返り、最後に6名の加害者たちがサラビアナに謝罪する時間がありました。

謝罪したい男性たちとサラビアナさんのために会場である礼拝堂の前方にイスが用意されました。そして、加害者の男性が一人一人立ち上がり、マイクの前に立ち、謝罪の言葉を述べました。皆一様に表情が硬く、感極まるといった感じの人はいませんでした。謝罪の言葉も、「虐殺の時、あなたを攻撃した集団の中にいた」、といった具体性に欠けるものばかりでした。しかも、なぜこれまできちんとした謝罪をしなかったのか、説明する人はいませんでした。

一人の謝罪が終わる度に、サラビアナさんが応答の言葉を述べられました。その言葉は、「もし本当に罪を悔いているならあなたを赦します」という、「もし」の着いた言葉であり、加害者たちの謝罪が彼女の心に響くものでなかったことを伺わせました。私には、加害者が形式的な謝罪を終えるごとに応答を強いられる立場に置かれた彼女がとても痛々しく感じられました。そして、「もっと別のやり方が出来なかったのだろうか」と、集会の後もしばらく、もやもやしたものが胸の中にオリのように溜まったままでした。

その集会の翌日、サラビアナさんの家を訪ねました。「昨日はどうでしたか」と私が尋ねると、彼女は「もし、心からの謝罪なのであれば、良いことだと思う。でもポールさん以外は本当のことを言わなかった」と表情を曇らせました。彼女の心に響いた謝罪をしたのは一名だけだったのです。

「真摯な謝罪でなかったことで傷つきませんでしたか」と私が尋ねると、彼女はどのように答えました。「それは私の問題ではありません。真実の謝罪をしないことで彼らは二重の重荷を背負うことになるのです。それは私にも重荷ですが、彼らにとってはもっと深刻な重荷です。彼らは自分自身のために謝罪することが必要なのですから…」そして最後に私が「どうしたらいいでしょう」と尋ねると、彼女は

「悔悛と謝罪についての学びがもっと必要だと思います」、と言われたのでした。それは私には、「和解をあきらめない」という宣言として響いたのでした。

その後、「謝罪をテーマにした講習会をいつか企画し、それから再チャレンジだ」との思いを持ちながらも、ピアスでの忙しさもあり、なかなか行動に移せずにいました。そんな折、加藤さんからドキュメンタリーの話があり、「神様が与えてくれた良い機会だ」、と一歩踏み出す決断をしたのでした。

まだ番組をご覧になられていない方は、事務局から録画 DVD を貸し出していますので、ぜひご覧ください。5月にキレへを訪ねた折、サラビアナさんとアンドレさんにお会いしました。お二人とも明るい表情で、収穫期を迎えて経済的に余裕のできる6月に、二人で協力して親族を招待し、そこでアンドレさんが謝罪をし、サラビアナさんが応答の言葉を述べる集まりを持つ予定だと言われていました。ぜひ私もその場所に立ち会いたいと思います。

もし、サラビアナさんが和解をあきらめていたら、アンドレさんが自分の罪に真摯に向き合い、心から謝罪をすることの出来る日は来なかったでしょう。

「和解の主」イエス・キリストが、これからもお二人と共に歩んでくださるように、そして、村の人々の和解のプロセスをさらに深めていってくださるように祈ります。



<自宅を訪ね、ドキュメンタリーを視聴した後で>

「 “人に寄り添う” 佐々木さんにしかできないこと 」

加藤 麗
かとう うらら

NHK鹿児島 ディレクター (PIASS元留学生)

「赤土の大地が広がるアフリカ・ルワンダ共和国。隣り合って畑を耕す男性と女性。男性はジェノサイドの加害者、女性は被害者だ-」番組冒頭の映像にドキッとされた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。佐々木先生を追った撮影の中で見たのは、衝撃的なことばかりでした。自分の親族を襲った加害者と隣り合って暮らす、深い葛藤。そして苦しみと向き合い続けたからこそ生まれてきた希望。まさに“奇跡”が起こった撮影現場の舞台裏をお話しさせていただきます。

番組を企画したきっかけは、私の留学時に生まれた“後悔”です。私は佐々木先生と幸運にも出会い、2013年にピアス大学に1年留学しました。ルワンダで平和について学ぶ日々の中“ジェノサイド”はいたるところにあったように思います。授業中友人が自分の過去について話すとき、両親がいかにかして殺されたかが語られました。知り合いと話していて「何人家族か」と聞くと、ほとんどがジェノサイドで殺されていました。私はルワンダの国と人がとても相性が合うと感じ、親友や家族のような存在を多く持つことができました。しかしジェノサイドのこと、特に当時の感情や今も残るトラウマについては深く聞くことが出来なかったのです。NHKに入ってから、いつかルワンダの悲劇と向き合う番組を作りたいと願っていました。

佐々木先生を目線からルワンダを描く、願ってもないチャンスを得たのは昨年11月。企画を出したときには、まだ入社2年目のディレクターに任せるのは早いのでは…という声もありましたが、佐々木先生の活動が唯一無二のものであり、多くの人に伝える価値があるはず、ということが伝わり撮影にGoサインができました。

撮影は今年の1月と2月に、3週間かけて行われました。最初に決まっていたのは、PIASS大学での授業の撮影と、農村地区において佐々木先生が加害者に対



して行うトレーニング（残念ながら番組内では一瞬しか使えませんでした）だけでした。トレーニングは佐々木先生が加害者たちに対して「謝罪の意味」について教え、謝罪方法を一緒に考えるものです。その後加害者の方々が、どのように行動するのかを追っていきます。どんな展開があるのか先が読めない、ある意味とてもリスクのあるロケです。

この方法を選択したのは、佐々木先生から事前にサラビアナさんの話を聞いていたからです。サラビアナさんは番組の準主役となった被害者の女性です。23年前のつらい記憶に普通の人はなかなか向かい合うことはできません。しかしサラビアナさんは、まだ正式な謝罪に来ていない加害者たちとの対話を望んでいました。彼女と加害者たちの現在進行形の心の揺れ動きを追っていくことで、ルワンダ社会でタブー化され、なかなか語れないジェノサイドの現実を垣間見ることができると考えたのです。

いよいよ撮影が開始。トレーニングの前にサラビアナさんと加害者の方の生活を追っていくと、早速ジェノサイドの傷跡が見える1シーンがありました。養豚場で一緒に作業するところにお邪魔したときのことです。作業中どんな表情で何を話すのか。ドキドキしながら見守っていました。しかし実際には拍子抜けをするくらい、自然に「隣人として」会話をされていました。「おはよう、今日は雨が降って良かったわね。作物が不作だから大変ね……」。サラビアナさんの表

情が変わったのは、加害者側の方が帰り、私たちがサラビアナさんにインタビューをしているときのことでした。手で頭を抱え、ときに声を荒げながらいまだ加害者への不信感を持ち続けていることを告白されたのです。「今でも日が暮れてから1人で歩くのが怖い。夜にノックをされると、誰かが襲いに来たのではないかと思う」と。村の人々と共生しなければ生活していけない社会の中、過去あったことを記憶の奥底に閉じ込め、平気な顔をつくって加害者たちと過ごすのは、どれほどの葛藤と恐怖があったのでしょうか。虐殺で多くの親族を亡くし、今1人で暮らすサラビアナさんは頼りにできる人は多くありません。どれだけの孤独感があったのでしょうか。

そんな中唯一のよりどころになっているのが、矛盾に聞こえるかもしれませんが、加害者たちとともに働く養豚組合です。養豚場は唯一自分の話を聞いてもらえる場所で、孤独を忘れさせてくれるといいます。サラビアナさんは養豚場で繋がった加害者たちとの絆を、表面的にではなく本当の意味で回復し、「隣人」に戻りたいと考えていたのです。そこで佐々木先生に助けを求めていたのです。

佐々木先生の活動が唯一無二のものだと感じるのは、被害者と加害者が本当に深いレベルで和解をするまで寄り添っている点です。ルワンダでは、今平穏を取り戻しているのだから、過去のことは触れないでおこうと考える人がほとんど。過去の傷が放っておかれることで、わだかまりを持ち続ける人が多く居ます。しかし、佐々木先生は大学の仕事で寝る時間もないほど働き続けているにも関わらず、足繁くキレへ地区を訪問。サラビアナさんの話を何年も聞き、寄り添ってきました。だからこそサラビアナさんは本当の和解をしたいと声に出せたのだと感じます。



トレーニングの結果、加害者6人中5人が謝ることを決意しました。一人一人に佐々木先生が面談していくと、先生が「この人は決意が強いと感じる」と仰った人が居ました。それがサラビアナさんの幼なじみのアンドレさんであり、撮影はアンドレさんに密着することに決まったのです。その後の展開は番組の中で出来るだけ丁寧に描きましたので、ここでは省略いたします。

今回取材者として感じたのは、表面上和解できても、心の奥底から赦し赦されるのがどれだけ難しいかということです。アンドレさんも好きでジェノサイドに参加したわけではありません。参加したのはしょうがなかったと、自分に言い聞かせてきたのでしょうか。心からの謝罪を被害者にするには、自分の罪と心底向き合わなければいけません。想像もつかない苦しさがあったはずですが、佐々木先生は被害者だけでなく、加害者であるアンドレさんにも時間をかけて親身に話を聞いていました。視聴者からの感想にもありましたが、第三者の仲裁人として佐々木先生が居たからこそ、2人の対話は成立したのだと思います。

番組終了後、驚くほどたくさん感想が私達の下に寄せられました。どれも佐々木先生の活動と志、そしてルワンダの人々の勇気に感動したという声です。伝える価値のあるものが多かったために、削らざるを得なかったシーンがあったことは残念でした。例えば、サラビアナさんと完璧な和解を遂げたタデヨさんのこと、PIASSで成長してゆく学生のみなさんのこと。ひとえに私の能力不足によるもので、もっといい編集ができたのではないかと今でも感じています。

佐々木先生の和解の活動は次のステップへ進んでいます。先生の教え子であるセルジさんが今、キレへや他の地区での和解の活動を引っ張っているのです。佐々木先生の精神を引き継ぎ、被害者と加害者の両方に寄り添っており、今まではキレへの村の人皆から愛されるような存在なのです。佐々木先生の蒔いた平和の種が次々と芽生え、花が咲こうとしています。もし数年後ルワンダに戻り撮影することができたら満開の花々が撮れるのではないかと、今から思い描いてしまう日々です。

「“変化の大陸”で感じたこと」

河野 賢太

こうの けんた

初めまして、東京外国語大学三年の河野賢太です。1994年、まさにルワンダでジェノサイドが始まる直前の3月に、韓国・ソウルで生まれました。その数年後には日本に引っ越してきて、大学に進学するまでは関西で育ちました。母は韓国人、父は日本人です。僕は2016年9月からPIASS(Protestant Institute of Arts and Social Sciences)にて

Peace and Conflict Studiesを専攻しています。今回は今までの留学生生活を振り返った上で、僕が伝えたい事をシェアさせて頂ければと思います。

早速質問なのですが、「なあ、知ってる？今から俺らが行く銭湯、韓国人がけっこうおっこやうんこしてるらしいで？」と銭湯へ行く際に友人からこう言われた際、あなたが僕ならどう答えますか？友人は悪意を持って言っているわけではありません。何て事を言うんだ、と怒りますか？それとも悲しくなりますか？僕がした事は、一笑ってやり過ごし、聞かなかった事にした一でした。なぜか。事を大きくしたくないし、何よりも怖かったから、です。

ルワンダに来るまでは、「韓国」と名がつく話題は無意識に避けていました。今まで「やーい、韓国人！」と言われたり、バイト先の社員が「SAMSUNGのスマホはキムチ臭い。チョンスマホ(笑)」と言って盛り上がり(彼らは僕の生い立



ちを知らずに言いました)など、この手の事を経験しており、極力傷つきたくなかったのです。嫌な事があっても忘れようと努めてきました。

そんな僕ですが今年の1月に「和解の理論と実践」という佐々木先生の授業を受講し、その際に「在日韓国人とヘイトスピーチ参加者の和解」というテーマでプレゼンテーションを行う事になりました。これは僕にとっては大きな意味を持ったと実感しています。自分の内面と深

く関わるので、僕はこの手の事を普段他人に話す事は一切ありません。ですが、他の日本人学生と一緒にヘイトスピーチについて話したり、他のアフリカ人学生・欧米からの学生とディスカッションをしたことを通して、今まで自分だけで抱えていた事を大勢の友人とシェアできました。「あ、俺って一人ちゃうかったんや」と思い、胸が軽くなった気がしました。

プレゼンテーションの準備の際にヘイトスピーチの動画をたくさん見たのですが(普段は見ないです。というか“見られ”ません)、ヘイトスピーチ参加者達は何かに取り憑かれたように、聞くに堪えない罵詈雑言を発していました。彼らと在日韓国人の和解なんて本当にできるのか、と正直僕は考えていました。

そんな時、ジェノサイドの被害者と加害者の方が授業にゲストスピーカーとして来られました。一時は殺し・殺されかけた関係の2人が、目の前で憎し

み合う事なく微笑んでいる。その様子を見たときの衝撃は計り知れません。彼らの姿を見て、今憎しみをぶつけているヘイトスピーチ参加者との和解への道は閉ざされていない…そう確信しました。

ルワンダでの経験、特に和解の授業を経て、僕は思います。「なあ、知ってる？今から俺らが行く銭湯、韓国人がけっこうおしっこやうんこしてるらしいで？」と友人が呟いても、今なら「いや、俺のおかん韓国人って事知ってるやんな？なんでそんな事ゆうん？うんこしただのおしっこしただの、いい加減な事言って人を傷つけたらあかんで」と諭せる、と。そして以前はある意味怯えていた僕が、ヘイトスピーチ参加者と在日韓国人との和解に向けて、今や何かしようとさえ思っています。

ジェノサイドを経験した友人はこう言いました、「ルワンダの歴史を見ての通り、アフリカは変化の大陸だ」と。本当にその通りだと僕は思っています。こちらでの生活は変化と驚きの連続です。人は様々な感想を抱きます。僕自身、日本から遠く離れたルワンダ/アフリカの地で、自分のアイデンティティーに向き合うとは夢にも思っていませんでした。僕は、授業だけではなく、寮に住んで学友たちと同じ釜のメシを食ったり、周辺国に住む友人を訪れたり、ホームステイをさせてもらったりと、留学でしかできない貴重な経験をさせて頂いているのですが、特に12月に2週間、ブルンジ人の友人の実家に泊まらせてもらった時の経験が忘れられません。ちなみに、僕は父親と母親の会話をもう10年は見ていません。「家族」というものをもう忘れかけていました。その事をステイ先の家族に話したのですが、僕にとっては当たり前のそのことに、彼らはとても驚き、悲しんでくれました。そのことにまた僕自身、正直驚かされました。

そして滞在最後の晩餐中、突然友人の両親がこう切り出したのです。「ケンタ、一つ話したい事がある。“父親と母親の会話をずっと見てないし、実家に恋しさなんて微塵もない”、そう言ったね。私たちはとてもショックを受けた。悲しくなったんだ。私たちが直接どうこうする事は残念ながら出来な

いけど、少しでもケンタの家族に平和が訪れるよう、祈らせて欲しい」と。あくまで自分たちの娘のクラスメイトでしかない僕のために、本気で悲しんで、祈ってくれる温かさに胸を打たれました。2週間のブルンジでの滞在では、彼らの温かさに触れました。つい先週も2回目の訪問をしたのですが、家族のように迎えてもらいました。本当に感謝しています。

さてこのようなルワンダや周辺諸国での経験を経て感じたことなのですが、今(そして今後も)アフリカに圧倒的に足りていないものがあります。それは職です。大学を出たエリートでさえ、その多くは職にあぶれるのが現状です。しかし国連の統計によると、2050年には少なくとも10億ものアフリカ人が雇用を必要とすると言われています。

不足している雇用を増やすべく、大学卒業後はNGOではなく企業に就職しようと思います。というのも、現地の人を工場で数多く雇用し、生産した製品を海外ではなく地域単位で消費する、といった循環可能な仕組みを作りたいと思っているのです。今アフリカで起きている紛争の多くは、天然資源頼みの脆弱な経済基盤に由来するものです。しかし雇用を得て、安定した収入があれば、安易に武力紛争に駆り立てられる人も減ります。ビジネスを通して、雇用を創出する。これが僕が実現させたい、僕なりの平和構築です。

最後に日本に住むマイノリティーとしてのお願いなのですが、ルワンダのジェノサイドは決してルワンダ固有の問題ではありません。ルワンダのジェノサイドは、“遠く離れたアフリカの地で、ラジオを鵜呑みにした無教養のルワンダ人が民族憎悪を引き金に殺し合った”わけではなく、民族の差異を利用した政治闘争の結果という事を理解して頂きたいのです。日本も100年足らず前の関東大震災の時に韓国人に対するジェノサイドを経験しました。そしてジェノサイドの過程において、相手を非人間化するロジックはどこでも同じです。1994年ルワンダではラジオが「ツチはゴキブリだ。根絶やしにしなければならぬ。女を味見しよう」と語り、2016年東京都知事選では「とことんまで舐めきったオチ

「ヨンコを叩き殺しましょう(原文ママ)」と語った活動家が東京都民12万人の支持を得ました。1994年のルワンダとまではいかないまでも、今後異常事態が発生した時にヘイトクライムが起きる可能性は拭えません。

今回の留学報告ですが、以前の僕だと「韓国人としての自分」については一切触れず、泥臭い事は書けなかったでしょう。今回の留学で自分と向き合う

きっかけを与えて頂いただけでなく、常日頃色々な面でお世話になっている佐々木和之先生・恵さんには改めて厚い御礼を申し上げ、ここで結びとさせていただきます。正直言うと今回書くべきかどうか悩んだ箇所もありましたが、あえて書きました。日韓両方にルーツを持つ僕の経験から、伝わるもの・動かされるものが少しでもあればとても嬉しいです。読んで頂き、ありがとうございました。

事務局からのお知らせ

● 今号は、NHK BS-1 で放映された佐々木和之さんのドキュメンタリー番組を制作した加藤麗さん(PIASSへの最初の日本人留学生、現在NHK勤務)に、ご寄稿いただきました。

● 佐々木さんのドキュメンタリー番組 DVD貸し出し

2017年3月16日、NHK BS-1で、佐々木和之さんのドキュメンタリー番組「明日世界が終わるとしても」が放映されました。ご覧になりたい方のために、DVDを貸し出ししています。事務局の洋光台キリスト教会(蛭川明男牧師) TEL 045-774-9861にお申込み、お問合せ下さい。

● 佐々木さんを支援する会主催 第二回「平和と和解・宣教フォーラム」

佐々木さんの活動は第5期に入り、「アフリカの大湖地域において平和と和解の働きに仕える人を育て・繋ぐ働き」を継続しています。佐々木さんから直接、現在の活動状況やアフリカの平和と和解の課題をお聞きし、日本の私たちの平和と和解の課題を考えるフォーラムにしたいと願っています。

日時：2017年11月17日(金) 14時～18日(土) 11時

会場：「天城山荘」(伊豆市湯ヶ島 2860-1 電話 0558-85-0625)

参加費：6,500円(一泊二食)

参加申込み：参加申込書を、FAXか郵送で、事務局長までお送りください。10月24日締め切り

事務局長 播磨 聡 〒730-0841 広島市中区舟入町12-7 電話082-293-8683 FAX 082-293-5172

● 佐々木さんを支援する会主催「ルワンダ第3回、和解の現場・訪問ツアー」

2019年に訪問ツアーをおこないます。虐殺の現場を訪ね、その悲劇を心に刻みつつ、佐々木さんの活動現場を訪問します。ぜひ、今からご検討ください。詳細は、今後ウブムエ等で紹介いたします。

●事務作業簡素化のため「振替用紙」を同封しています。請求ではありませんのでご了承ください。

●郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会●

●佐々木さんを支援する会HP(ホームページ) <http://rwanda-wakai.net/>

佐々木さんの活動報告、写真館、等。HPから入会手続きも可能。佐々木和之さん、恵さんのブログも適時更新。

●世話人会 加藤 誠(大井教会牧師)、中條智子(長住教会牧師)、播磨 聡(広島教会牧師)、蛭川明男(洋光台教会牧師)、米本裕見子(日本バプテスト女性連合幹事)